富山市埋蔵文化財調査報告35

富山市水橋金広・中馬場遺跡
発掘調査報告書

—市道水橋中馬場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2009

富山市建設部道路課
富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、富山市水橋中馬場地内に所在する水橋金広・中馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は富山市建設部道路課が行う市道水橋中馬場線道路改良工事に伴うもので、工事立会中に確認された遺構等について、記録保存調査を行った成果を報告するものである。
3　調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが主体となって行った。
4　調査期間　　現地調査　　平成14年12月～平成20年9月24日
　　出土品整理　平成20年9月1日～平成21年3月31日
5　調査及び出土品整理にあたり、次の方々よりご協力を賜った。記して謝意を表します。
　鹿熊久三、中馬場町内会（順不同・敬称略）
6　出土木製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所による高級アルコール処理法で行った。あわせて実施した樹種鑑定結果を本書に掲載した。
7　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
8　本書の執筆は、古川知明・鹿島昌也・野垣好史が分担して行い、各々の責を文末に記した。

凡　　例

1　挿図の方位は上が座標北、水平水準は海抜標高である。
2　公共座標は日本測地系を使用した。これは平成11・12年度県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う発掘調査時に設置の公共座標（日本測地系）を利用したためである。
3　遺構表記は次のとおりである。
　ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、Ｐ：ピット

目　　次

Ⅰ　経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 5
Ⅲ　調査の成果
　1　13年度試掘確認調査 …… 7
　2　14年度調査 …… 7
　3　19年度調査 …… 14
Ⅳ　理化学的分析―井戸枠板材の樹種調査 …… 15
Ⅴ　総括 …… 16
写真図版 …… 19
報告書抄録 …… 24

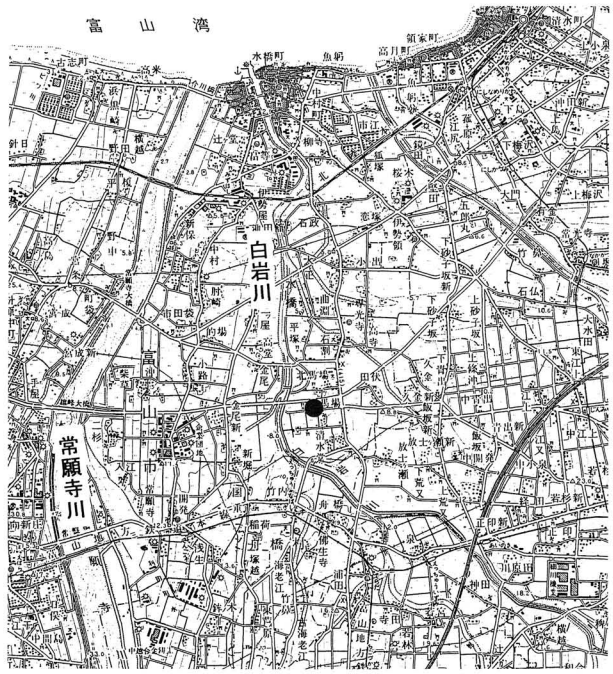
Ⅰ　経過

1　調査の経過

水橋金広・中馬場遺跡は、昭和63年～平成3年に富山市教育委員会が実施した市内の分布調査で発見した遺跡である。その際には縄文土器・土師器・須恵器・珠洲焼等を採集し、縄文～近世の散布地とした。遺跡はNo251水橋中馬場遺跡として、平成5年3月発行の『富山市遺跡地図』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。この時点での遺跡範囲は75,000㎡である。

その後、平成5年北陸新幹線に伴う分布調査成果の公表、平成9～12年度の県営農免農道整備事業（上条南部地区）に伴う試掘確認調査・発掘調査の成果に基づき、遺跡範囲の見直しを行い、平成13年1月に現在の範囲（320,400㎡）となった。遺跡内には若王子塚古墳・宮塚古墳を含む。若王子塚古墳は、平成12・13年度の県営農免農道整備事業に伴う発掘調査、試掘確認調査、地中レーダー探査により、周溝幅4～5m、墳丘径46mの大型円墳であることが判明した（富山市教委2001）。

平成12年、農免農道に交差する市道水橋中馬場線の改良工事計画が、富山市建設部道路課により計画され、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。工事は、現路肩にL型擁壁を敷設して拡幅するもので、現道から両側へ1.5m、現況水田面から20㎝以上掘削が行わ



第1図　遺跡位置図（1：100,000）

第2図　調査位置図（1：6,000）

れる内容であった。協議の結果、拡幅部分について埋蔵文化財センター職員立会のもと試掘確認調査を行い、その結果に基づき保護措置を決定することとした。

試掘確認調査は、平成13年11月に、北側路肩部分を東端から若王子塚古墳東側まで472mを対象として実施したところ、全線から遺構・遺物を検出した。

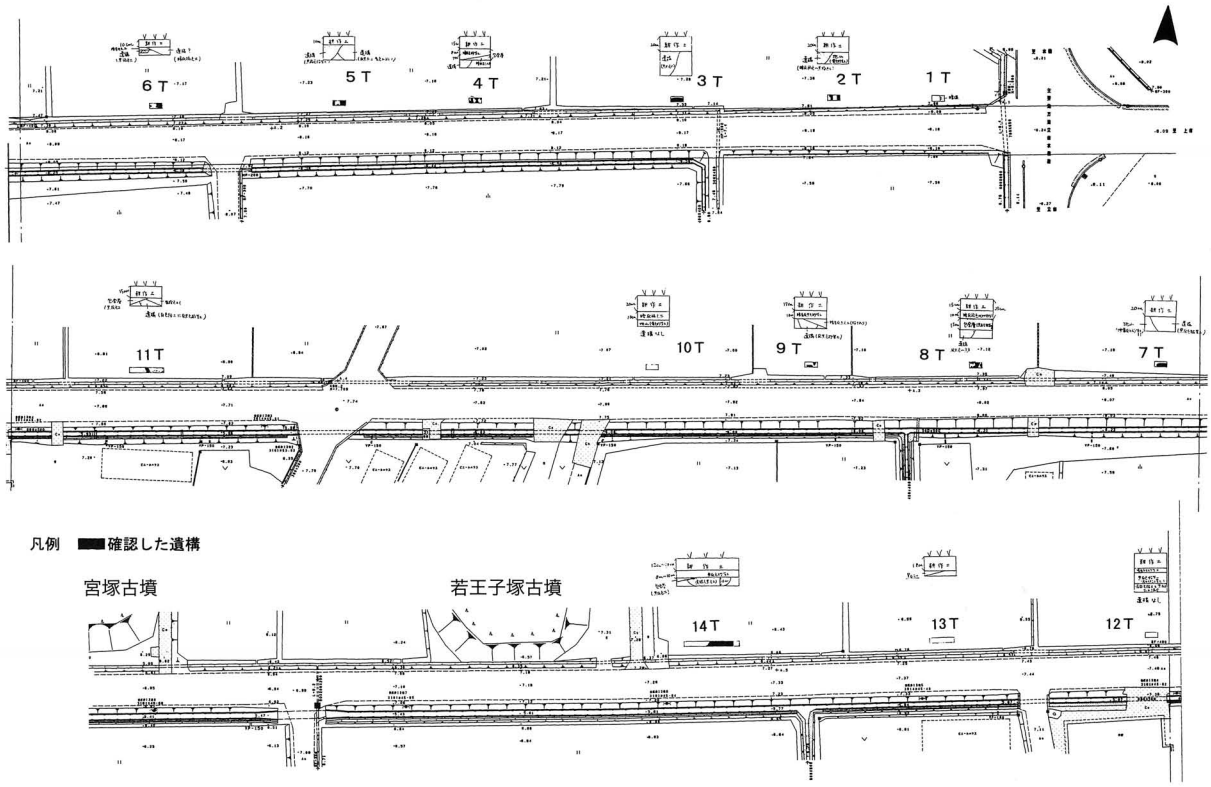
この調査結果に基づき工事内容と調整を行い、「富山県発掘調査等対応基準」（平成11年4月1日施行）に基づき、擁壁工事の掘削深度が遺跡上に設けた保護層に及ぶ部分は工事立会、それ以外は慎重工事とした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

2　発掘・整理作業の経過

【14年度】　工事は、平成14年12月、東端の主要地方道立山・水橋線側の北側路肩拡張部から開始された。工事範囲は延長224mで、平成14年12月に1日間の工事立会の結果、遺構は確認されなかった。担当者：古川。

平成15年3月には引続きその西側172mの工事が追加された。平成15年3月2から4月2日に5日間の工事立会の結果、井戸跡・溝等の遺構が確認されたため、引続き発掘調査を行い、記録保存措置を完了した。発掘調査面積は344㎡。担当者：古川・鹿島。

【17年度】　16年度において若王子塚古墳の残存墳丘南麓における工事が予定されたが、墳丘部であるため、地元了解を受けて、協議により拡幅は中止された。これにより道路北側拡幅工事は本年度をもって終了した。引続き南側拡幅部の工事を17年度から行うこととなった。工事は西端から38mが計画され、平成17年9月26日および平成18年3月28日に1日間づつ工事立会を行った。西側は古墳周溝該当部分であるが、遺構・遺物は検出されなかった。担当者：堀沢祐一・小林高範。

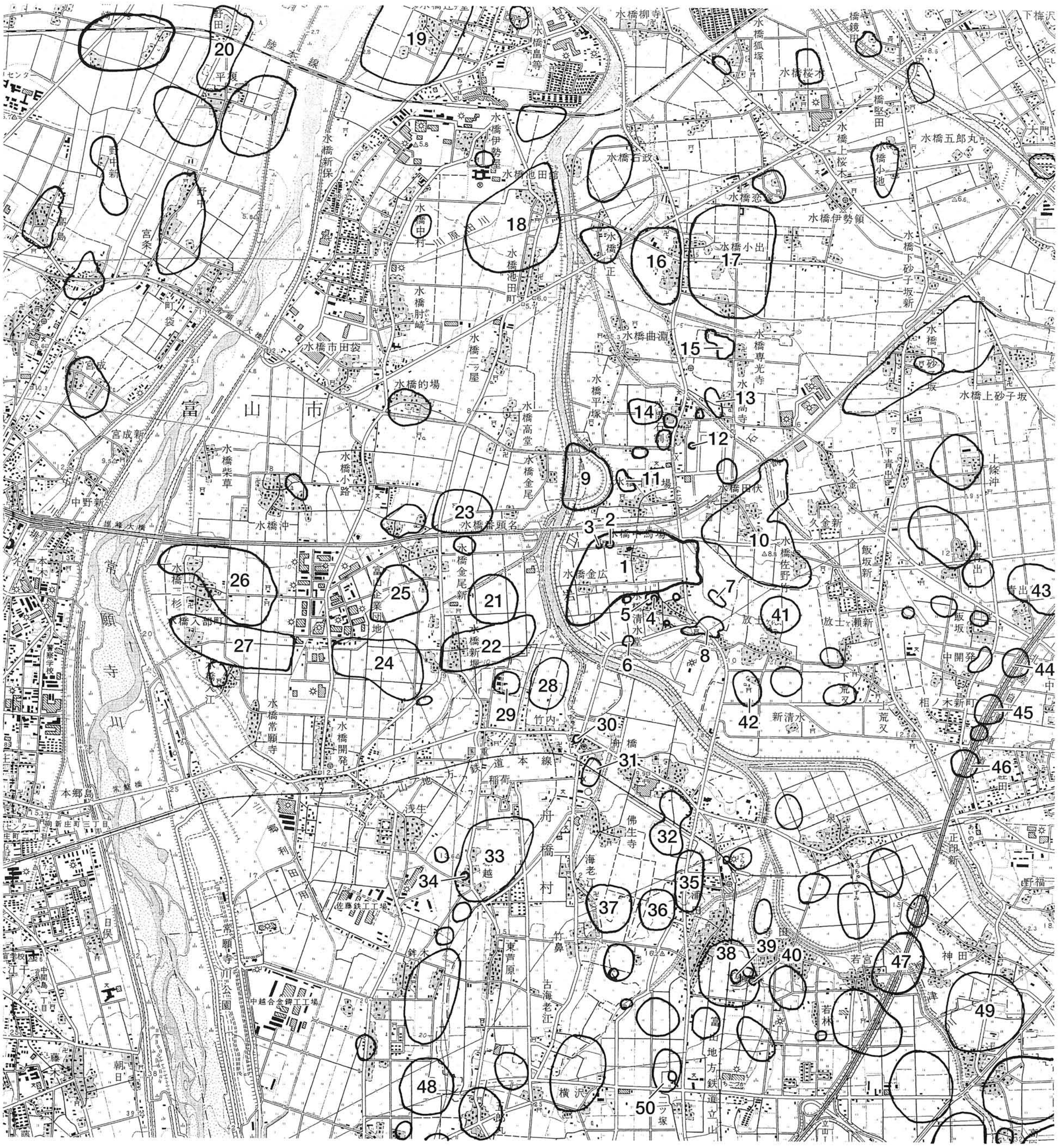


第3図　調査区区分図（1：1,200）

【19年度】　工事は17年度工事区域の東側延長14mが計画され、平成19年11月5日に工事立会を行った。調査面積47.6㎡。その結果、幅4.2－4.4mの浅い溝が検出された。調査担当者は「古墳周溝」と報告した。担当者：堀内大介・真田泰光。

【20年度】　工事は19年度工事区域の東側延長20mが計画され、平成20年9月24日に工事立会を行った。調査面積40㎡。その結果、土坑・溝・ピットを検出した。出土遺物はなく所属年代は不明である。担当者：堀内大介・小林高太。

【21年度】　出土品整理・木製品保存処理・発掘調査報告書刊行を行った。



第4図　水橋金広・中馬場遺跡と周辺の遺跡（1：50,000）

1 **水橋金広・中馬場**（縄文後～晩、古墳、古代、中～近世）
2 若王子塚古墳（古墳前、中世）
3 宮塚古墳（古墳）
4 清水堂古墳（古墳）
5 清水堂B（中世）
6 清水堂C（中世）
7 清水堂F（中世）
8 清水堂南（弥生終末、中世、近世）
9 金尾（縄文後～晩、弥生～古墳）
10 田伏・佐野竹（縄文～近世）
11 水橋北馬場（平安、中世、近世）
12 水橋石割（奈良、平安、中世）
13 水橋高寺（弥生、奈良、平安）
14 水橋石割、（中世）
15 水橋専光寺（弥生後～古墳前、奈良～近世）
16 小出城跡（縄文後～晩、古墳前、奈良～近世）
17 小出（縄文後、奈良、平安、中世）
18 水橋池田館（古墳、奈良、平安、中世）
19 水橋荒町・辻ヶ堂（縄文中～晩、弥生、古墳前．後、白鳳～近世）
20 浜黒崎野田・平榎（縄文前～晩、弥生、古墳前、奈良～近世）
21 新堀東（弥生、古墳前、奈良～中世）
22 新堀（縄文晩、弥生後、古墳前、奈良～近世）
23 金尾新（縄文晩、奈良、平安）
24 新堀西（弥生～古墳、中世）
25 金尾新西（弥生～古墳、奈良～中世）
26 水橋二杉（奈良～近世）
27 水橋入部（弥生～古墳、中世）
28 竹内館跡（中世）
29 国重（弥生、古代、近世）
30 竹内天神堂古墳（古墳）
31 仏生寺城跡（中世）
32 小平（縄文、弥生、古墳、古代～近世）
33 塚越Ⅰ遺跡（縄文～近世）
34 塚越古墳（古墳）
35 浦田（縄文～近世）
36 浦田西反（弥生～近世）
37 浦田馬渡し（古代～近世）
38 浦田前田（縄文～近世）
39 稚児塚古墳（古墳）
40 瓢塚（中世）
41 放士ヶ瀬北（弥生、中世）
42 放士ヶ瀬南（中世）
43 江上A（弥生中・後）
44 飯坂（弥生）
45 中小泉（弥生中・後）
46 正印新（弥生中・古墳）
47 若宮B（縄文～近世）
48 利田横枕（縄文～近世）
49 辻（縄文～近世）
50 二ッ塚（縄文、古代～中世）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市街地の北東部、富山市水橋中馬場周辺に位置する。富山平野の東部を流れる白岩川の下流部に形成された扇状地の扇端部に位置し、同河川の右岸、標高7m前後に立地する。海岸部からの距離は直線で約4.5㎞を測る。大辻山に水源を発する白岩川は、明治38年の改修工事以前は蛇行して流れ、現在の河岸段丘や後背湿地などの微地形を形成した。下流では豊富な水資源を利用して早くから水田耕作が営まれ、河川を利用した水運、漁労活動も盛んに行われていた。

2　歴史的環境（第４図）

水橋金広・中馬場遺跡の周囲には、白岩川本支流の両岸および上市川の河岸段丘間に形成された微高地上に縄文時代から近世に至る数多くの遺跡が存在する。

縄文時代後～晩期には、本遺跡東部地区に建物跡を伴った集落が形成され、石冠・ヒスイ垂玉などが出土した（富山市教委1997）。

弥生時代後期には白岩川・上市川流域に上市町江上Ａ遺跡、滑川市魚躬遺跡、舟橋村浦田遺跡、富山市金尾遺跡・清水堂南遺跡など30余りの遺跡が出現する。それらのいくつかはまとまって村を形成し、それらを統括する「新川のクニ」というべき政治社会が形成されつつあった（久々2001）。江上Ａ遺跡や清水堂南遺跡では集落内で玉作りを行なっていた。

古墳時代には、白岩川本流域及びその支流栃津川・寺田川流域で、県内の平野部では数少ない古墳群が形成され、「白岩川流域古墳群」と総称している。支流大岩川右岸の丘陵尾根上には前期古墳とされる柿沢古墳群が所在する。（上市町教委・富山大学考古学研究室1993）。白岩川中流左岸の段丘端には藤塚古墳（円墳、立山町）が所在し、平野部に至ると稚児塚古墳（県史跡、葺石・段築・周溝・周庭帯を有する円墳、立山町）や塚越古墳（円墳、立山町）、竹内天神堂古墳（前方後方墳、舟橋村）、清水堂古墳（周溝を有する円墳、字名大塚、富山市）、宮塚古墳（方墳、富山市）、若王子塚古墳（円墳、径46m）が現存する。また、白岩川左岸の水橋金尾新地内に狐山古墳がかつてあった。同地内には塚の越、四ツ塚という字名があり、白岩川右岸の水橋平塚はかつて所在した大小の塚を平らにしたことからその名が付いたといわれている（『水橋町郷土史』）。平成14年の水橋金広・中馬場遺跡の調査では周溝のみを残す古墳（円墳2基）が確認された（富山市教委2006）。

水橋専光寺遺跡は古墳時代と奈良時代～江戸時代まで続く集落跡で、古代～中世にかけての掘立柱建物１棟、井戸跡143基、土壙95基、溝25条などがある。古墳時代初めの土師器や奈良～平安時代の須恵器、土師器、中世の珠洲焼、近世の越中瀬戸、多くの木製品や漆器類が出土した（富山市教委2005）。

奈良～平安時代には、古代官衙跡（『延喜式』に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」）と推定されている水橋荒町・辻ヶ堂遺跡が常願寺川河口近くに形成される。また、水橋二杉遺跡は、奈良時代後半～平安時代の集落遺跡であるが、「君万呂」や「犬□」の墨書土器や「女」偏のヘラ書き文字の須恵器が出土し、官衙的な性格をもつ遺跡と考えられる。さらに遺跡南方の立山町浦田から舟橋村にかけての町村境周辺を「東大寺領大藪荘」比定地とする研究報告があり（藤田1998）、その南に位置する辻遺跡（立山町）からは「射水」の文字が書かれた「里正」木簡が出土し、律令期の重要施設の存在が想定され関連が注目される。本遺跡や周辺からは当該期の遺物は若干出土するものの、遺構の検出を見ることがなく、耕地としての土地利用が想定される。遺跡北西約900ｍの水橋高堂地内に国分尼寺と称される寺院が所在する。水橋町郷土史には「高堂村国分寺廃

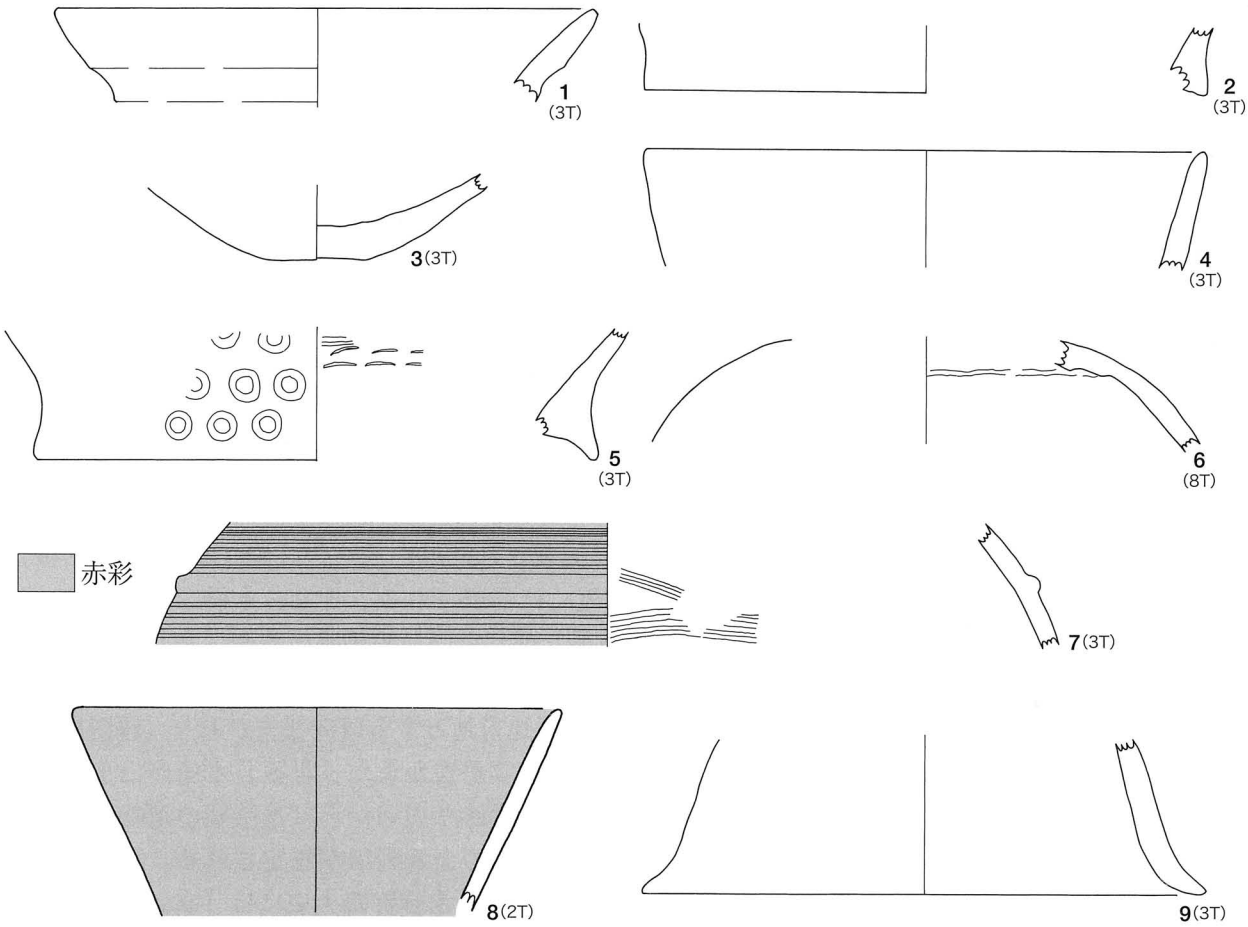
寺跡」と紹介され、射水郡の国分村の国分寺廃絶後、名前のみこの地に称させているとあるが、注目すべき地でもある。

中世に至ると、白岩川支流細川左岸に平城の仏生寺城（舟橋村）が築かれる。城主は越中五大将の一人細川曾十郎で、室町幕府管領の細川一族とみられ、室町期に当地で所領を得て城郭を築き居城した。細川氏は松倉城（魚津市）城主の椎名氏に属していたとみられる。仏生寺城北方の竹内館（舟橋村）も仏生寺の出城と考えられている。中馬場の地名の由来は、細川會十郎が白岩川の対岸のこの地に馬場をつくったことによるとされている。またその家臣の金広某が開墾を行ったことから金広の由来となったと伝えられている。なお、近年の発掘調査で仏生寺は15世紀～16世紀前半に最も機能していたことが判明し、その後は廃城になったようである（舟橋村教委2001）。

天正年間には水橋小出地内に小出城が築かれた。天文14（1545）年から天正11（1583）年までの間、古文書に見える城で戦国期の越中において、上杉氏と織田氏の攻防戦の中で重要な位置を占める城だった。佐々成政の越中平定後廃城になったと伝えられる。

これまで城の場所は特定されていなかったが、近年の発掘調査により小出神社の北側約200mの範囲に所在することがほぼ特定された。堀にあたる部分は、古い地籍図からも推測される。出土遺物には多数の漆器をはじめとする木製品のほか中国製の青磁の鉢、白磁の壷、硯、土師器の灯明皿などがあり、中でも土製弾丸の出土は当時の戦闘の一端を垣間みることができる。

中世末～近世には白岩川上流部で越中瀬戸焼の生産が隆盛する。本遺跡では越中瀬戸焼が高い割合で出土している。陸路や白岩川を利用した水運で窯場から製品を運び消費地へと供給されたものと推定される。（鹿島）



第5図　試掘確認調査出土遺物（1）

Ⅲ　調査の成果

1　13年度試掘確認調査

(1) 遺構（第3図）

試掘トレンチは市道北側の水田南端部に、東西方向に設定した。試掘トレンチは水田ごとに1本を入れ、若王子古墳までの間に15か所のトレンチを設定して調査を行った。

東側の2・3・5・7トレンチでは遺構が所在するが、遺物包含層（黒灰色土）は欠失していた。4・8・9トレンチは15cmの遺物包含層が所在した。西側の11トレンチでは薄い遺物包含層が部分的に残存していた。12・13トレンチでは遺物包含層が欠失し、また地山上部が削られていた。古墳に近い14トレンチでも同様の状況であったが、北東から南西方向に延びる幅3.8～4.2mの溝が確認された。この溝は深さ15cmを検出し、埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。埋土の色・性質は、若王子塚古墳の周溝ときわめて似ており、同時代の所産と推定された。

遺構は全般にわたって水田耕作土直下に所在することが明らかになった。（古川）

(2) 遺物

①弥生時代後期～古墳時代前期（第5図）

当該期の出土遺物はいずれも細片である。摩滅しているものが多い。

1は甕である。口縁部が大きく外傾する。白色砂粒を多く含む。2は甕の有段口縁部である。3は甕底部である。胎土に灰白色砂粒を多く含む。4は壺の口縁部と考えられる。5は壺の口縁部と考えられる。口縁下端が大きく垂下する。外面は竹管文が3段千鳥状に配され、内面は上部にハケ目、下部に2段爪痕が残る。6は壺の体部である。上端は口縁部との接合部である。内面上部は接合痕が明瞭にみえる。7は装飾壺の体部と考えられる。外面に突帯が一条めぐり、上下には凹線がみられる。外面は赤彩を施す。内面はハケ目調整である。灰白色砂粒多く含む。8は小型壺である。口縁部は外上方に直線的にのびる。内外面に赤彩を施す。胎土に白色砂粒を多く含む。9は器台脚部と考えられる。端部付近で屈曲して直線的に立ち上がる。胎土に灰白色砂粒を多く含む。以上の遺物は概ね南加賀漆町編年（田嶋1986）の白江～古府クルビ式に位置づけられる。（野垣）

②奈良～平安時代（第6図）

須恵器　10は大甕体部である。外面は平行タタキ、内面には同心円当て具痕が残る（8T）。

③鎌倉～安土桃山時代（第6図）

かわらけ　11は口径14cm、器高3.2cmで、口縁外面のナデが強い。口縁は外反し、端部は丸く内側に入れるため、端部内面に浅いくぼみができている（10T）。12は口径16cm、器高2.7cmで、口縁外面のナデ幅が大きい。口縁は内傾しながら立ち上がる（9T）。

珠洲　13～19は大甕である。13は頸部から肩部、14は肩部、その他は体部である。17は外面の平行タタキは細かく深い。19は胎土に海綿骨針を含む。

20は壺底部である（10T）。

21・22は擂鉢である。20は卸し目13本で、内面は使用により摩滅している。21は卸し目7～9本で、内面は使用により摩滅が顕著である。底面には幅3.2cmのハケ目状の痕跡が2箇所並行して残る。底部外面には成形直後の運搬時の指頭圧痕が残る。

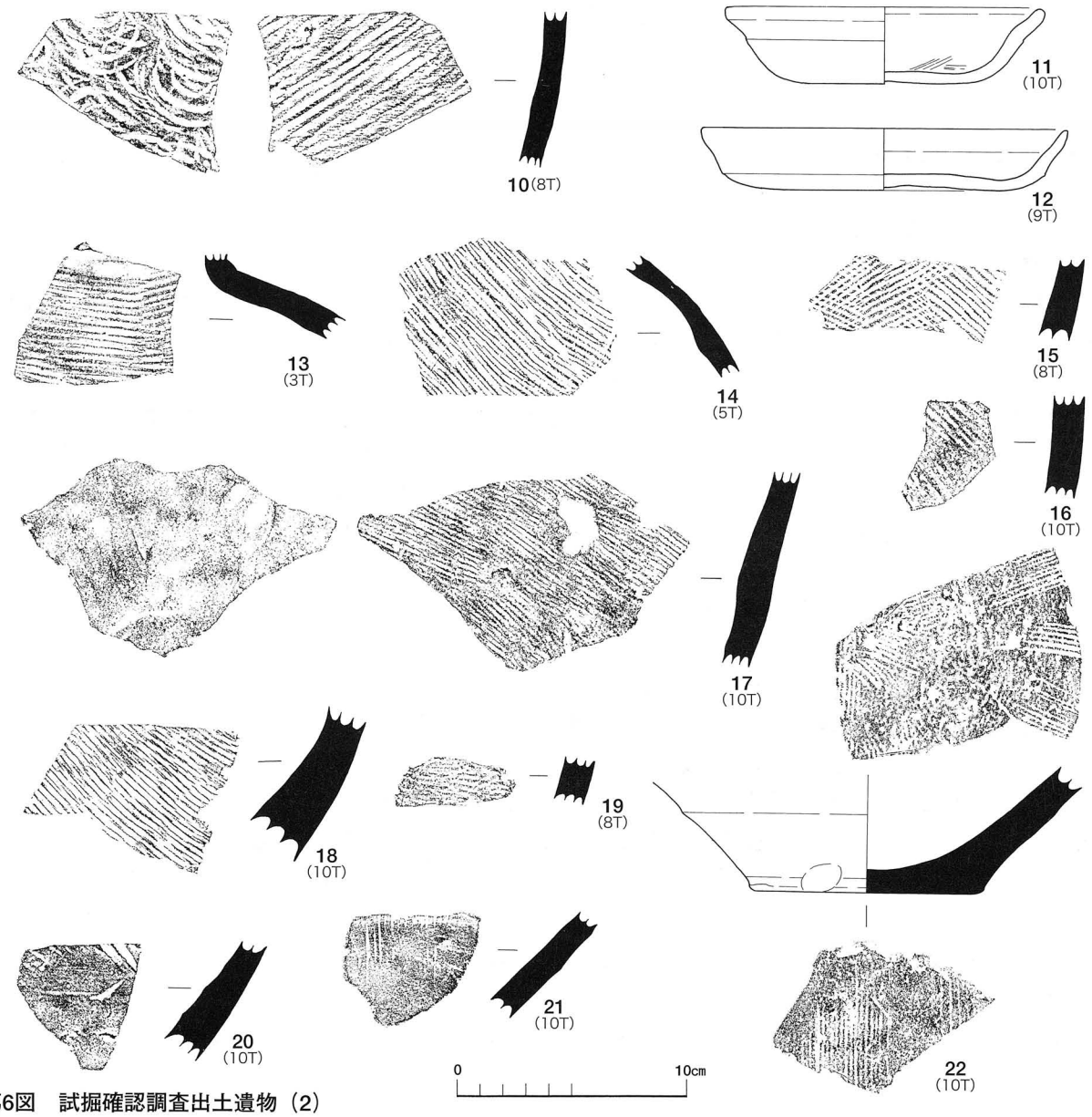
このほか図示していないが、凝灰岩製砥石小片がある。

2　14年度調査

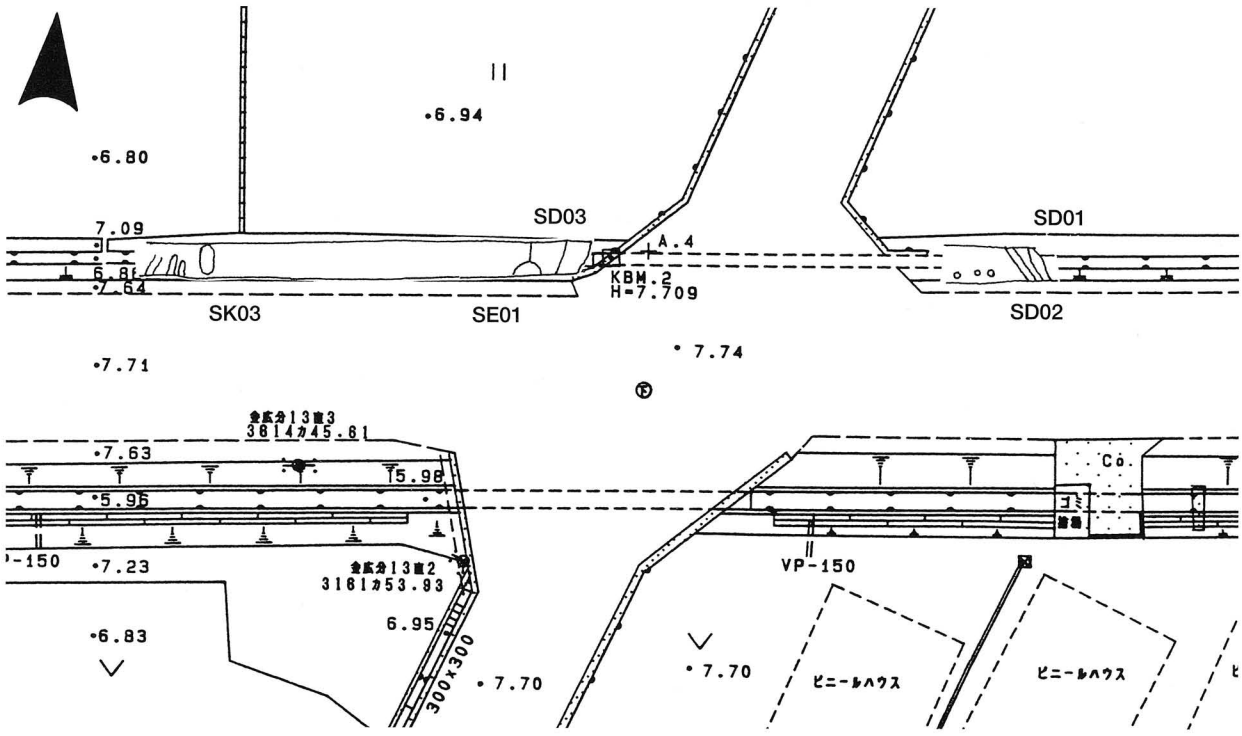
工事立会に伴い、水田耕土直下で遺構を検出した。遺構検出面で確認した地山は、上部が削平されている。発掘調査面積は54㎡である。

(1) 遺構

検出した遺構は、井戸1基、溝7条、土坑2基、ピット5基である。遺構は調査区の中央付近に集



第6図　試掘確認調査出土遺物（2）

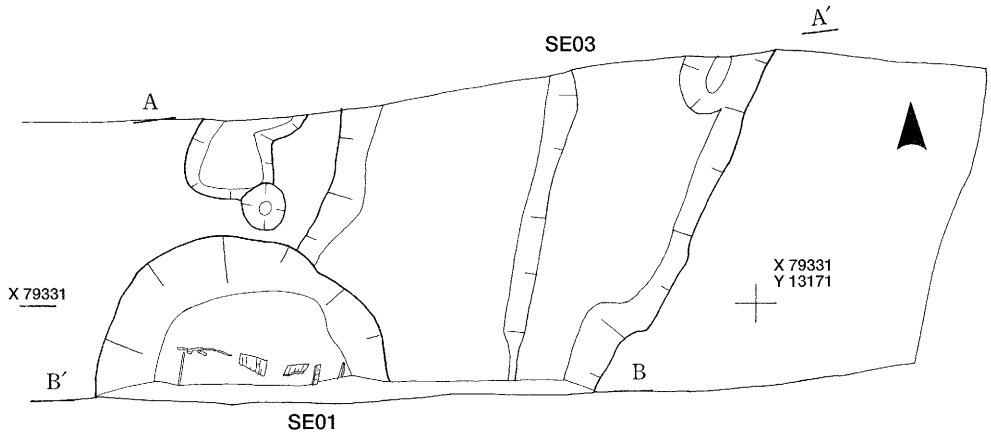


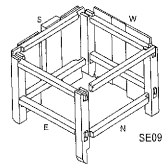
第7図　主要遺構配置図（1：250）

中する（第7図）。

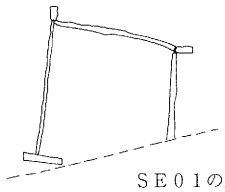
【井戸】（第8図）

ＳＥ０１　ＳＤ０３と重複し、北側約2分の1を検出した。ＳＤ０３が新しい構築である。検出面

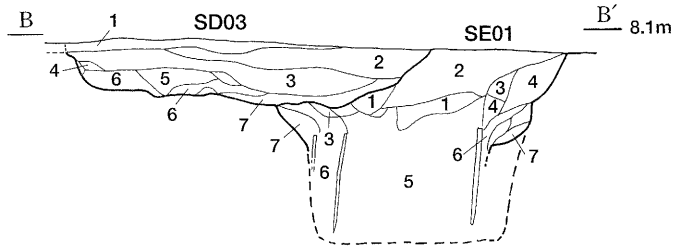




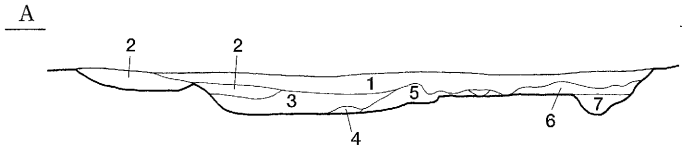
平成11年度調査の井戸
ＳＥ０９の構造模式図
（富山市教委2001より引用）



ＳＥ０１の上部における
黒色腐植土（井戸枠跡）
の検出状況

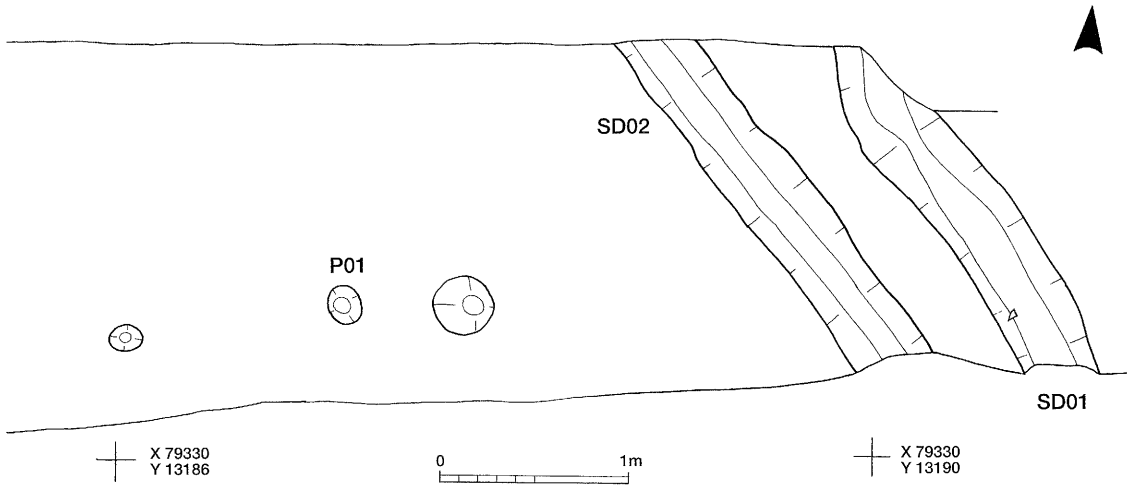


SD03（南壁）土層
1　灰黄褐色砂質シルト
2　暗灰色シルト質砂
3　暗灰色粘質土
4　灰色粘質土に黄灰色砂がラミナ状に入る
5　黒灰色シルト
6　黒灰色シルト質粘土
7　黒灰色粘質土



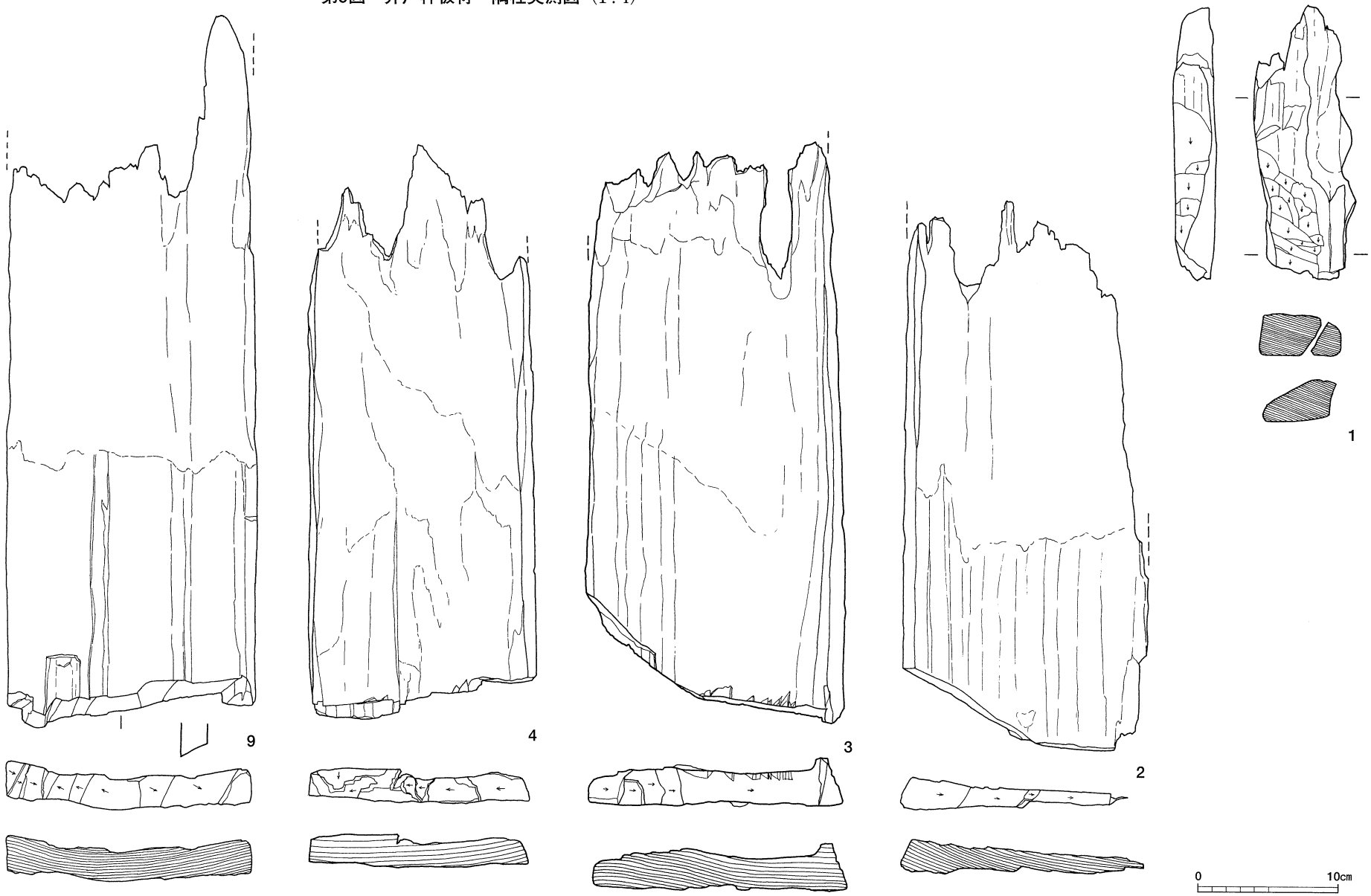
SD03（北壁）土層
1　暗灰色シルト
2　黒灰色シルト
3　黒灰色粘質土
4　黄灰色砂
5　暗灰色シルトに黄灰色砂がラミナ状に入る
6　黄色砂に黒灰色土・灰色土混じる
7　灰色砂・黄灰色砂混合

SE01（南壁）土層
1　黒灰色粘質シルト
2　暗灰色粗砂シルト
3　黒色粘質土
4　黒灰色土に黄灰色砂混じる
5　灰色粗砂
6　黒色シルト質砂
7　黒灰色粘質土



第8図　14年度検出遺構（1：40）

第9図　井戸枠板材・隅柱実測図（1：4）



における規格は、東西1.55m、南北0.85m以上で、検出面における平面形はほぼ円形である。深さは約50cmである。

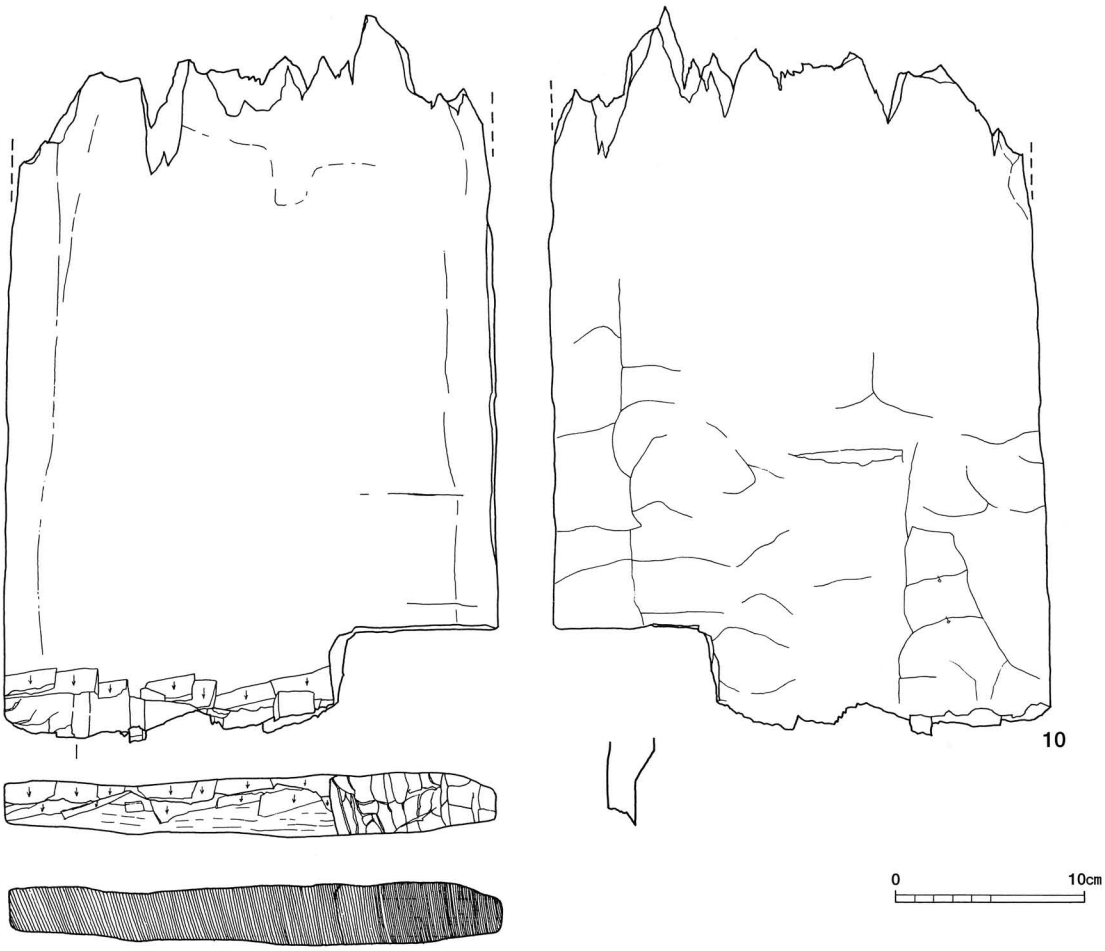
井戸枠は、方形縦板組で、厚さ0.9～2.9cmの厚板を方形に並べたものである。下端から最大約50cmが残り、上部は腐食している。調査では東・北・西の3辺を検出した。北辺のみ全体が確認できた。各辺は2枚以上の板材を並べ構成している。二重に重ねるなどの補強等は行っていない。井戸上部において板材が土壌化した部分を検出しており、板材の内寸は東西65cm南北70cmのほぼ方形である。この形状からみて、この井戸は隅柱をもつ方形縦板構造で、鐘方正樹による分類（鐘方2003）のA類（厚板横桟留型）に分類される。隅柱とみられる杭状の材は3本存在するが、いずれにもホゾ穴などの構造は残っていない。本遺跡における平成11年度調査で検出された井戸SE09の構造と同一である（第8図右上、富山市教委2001）。

井戸埋土は、1～4層が廃絶後堆積土、5層が井戸枠内埋土、6,7層が掘り方埋土である。
井戸枠内下層からは、焼けた円礫が出土した。安山岩・閃緑岩・縞状流紋岩がある。河川転石が熱を受けて破砕したもので、赤化・黒化している部分が多い。

また、井戸掘り方から古墳時代前期壺・平安時代須恵器・土師器皿、珠洲擂鉢（吉岡編年Ⅴ期）・モモ核が出土した。このことから井戸の廃絶年代は1380－1440年代以降とみられる。

【井戸枠部材】（第9・10図・表1）

取り上げることのできた井戸部材は13点である。うち3点が隅柱とみられ、残り10点が縦板材である。隅柱は遺存状況が不良で、1が先端部を尖らせる加工痕を確認できるほかは、ホゾ穴等の状況は不明である。断面形はいずれも長方形である。



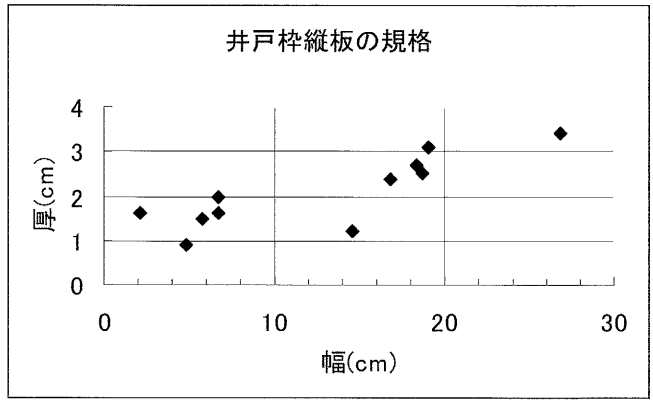
第10図　井戸枠板材実測図（1：4）

表1　井戸枠板材等規格

番号	部位	縦cm	横cm	厚cm	樹種	木取	先端部加工等
1	隅柱？	19.9	7.7	2.9	スギ	四方まさ	先端を削り細くする
2	縦板	39.3	18.7	2.5	スギ	板目取り	半分を斜めに切り、一方は平ら。切削角度75度
3	縦板	42.0	19.1	3.1	スギ	板目取り	半分を斜めに切り、一方は平ら。切削角度約85度
4	縦板	40.9	16.8	2.4	スギ	板目取り	先端平ら。右方向から90度で切削、左端は上から。
5	隅柱？	27.5	5.0	2.5	スギ	四方まさ	不明
6	縦板	31.0	14.6	1.2	スギ	板目取り	不明
7	縦板	35.6	6.7	1.6	スギ＊	板目取り	不明
8	縦板	33.8	5.8	1.5	スギ	板目取り	不明
9	縦板	42.7	6.7	2.0	スギ	板目取り	中央右から。左右端左から。切削角度60度
10	縦板	39.0	26.8	3.4	スギ＊	柾目取り	3分の1を方形に抉り取る。抉り取る角度90度。側面側から。3分の2は先端水平。切削加工は板の表裏から。切削角度は30～35度。
11	隅柱？	15.5	2.1	1.6	スギ	四方まさ	不明
12	縦板	50.5	18.3	2.7	スギ	不明	不明
13	縦板	12.0	4.8	0.9	スギ	板目取り	不明

注）樹種の＊は顕微鏡樹種鑑定を行ったもの（Ⅳ章参照）。他は肉眼観察による

板材は遺存状況の良否が激しい。板材の木取りは、10の1枚のみが柾目取りのほかは板目取りである。ただし白太部分の使用が少ない。面整形痕はほとんど残っていないが、先端部分の整形痕跡は比較的良好に残る。2・3は下端の約半分を側面から斜めに切り落とし、半分は平らとなる。4は端末を板面側からも垂直に切り落とす。9は中央と両側が異なる方向で整形される。4・9は端部がほぼ水平である。10は側面からではなく板の表裏面側から削って尖らせているが、これは木取りの方向の違いのためとみられる。削る角度は、板目の2が75度、9が60度、柾目の10は30～35度で、板目より浅い角度である。板目取りの側縁を削る道具は、鉇あるいは鉞が推定されるが、柾目の削り面は板に直交していることから、先の平らな鑿状の切削具を使用して加工を行ったと推定される。



右グラフは縦板の幅と厚みの相関である。幅15～20cmのものを主に使用し、幅5cm前後の薄い板で間を充填するなどしたとみられる。

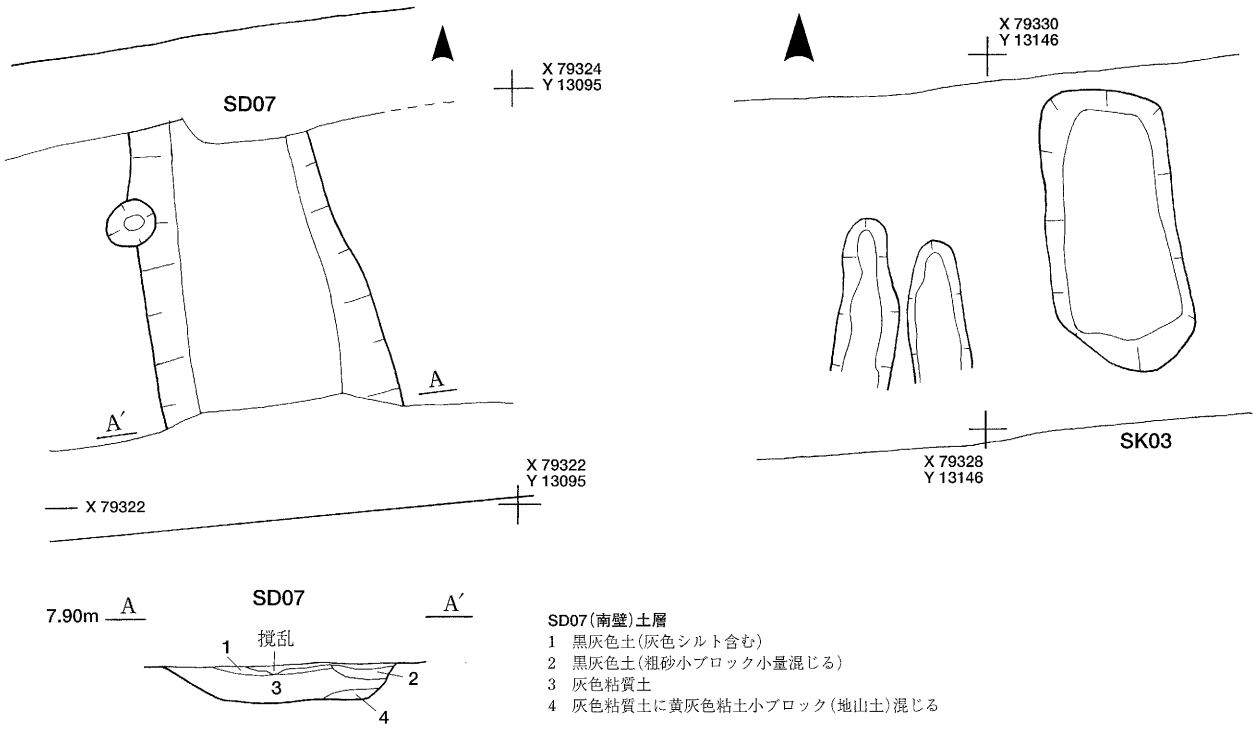
【溝】

ＳＤ０１・０２（第７図）

同じ幅40cmの2本がほぼ平行する。ＳＤ０１は、Ｎ－37°－Ｗで深さ10cm。やや蛇行する。ＳＤ０２は、Ｎ－40°－Ｗで深さ25～30cm。直線的に延びる溝である。ＳＤ０１の埋土上位から青磁片が出土しており中世に属する。

ＳＤ０３（第７図）　ＳＥ０１と重複し、ＳＤ０３が新しい構築である。南北方向に延び、主軸はＮ－21°－Ｅである。幅1.7～1.9m、深さは東側で27cm、西側は35cmで、西側幅約1.2mが一段深くなっている。上下で土質が異なり、複数層の堆積があることから、長期にわたり存続したとみられる。溝内からは平安時代の土師器椀（第12図26）が出土したが、井戸の年代からみて、混入と考えられる。

ＳＤ０７（第７図）　南北方向に延び、主軸はＮ－6°－Ｗである。幅0.95～1.25m、深さ18cm。埋土は黒灰色粘質土のほぼ単層である。底面直上から古代の土師器椀（第12図25）が出土したことから、構築時期は奈良～平安時代前期とみられる。



第11図　14年度検出遺構実測図（1：40）

【土坑】

ＳＫ０３（第７図）　長楕円形状で、1.5m×0.7mを測る。主軸方向はN－5°－Wである。土坑内からは弥生後期～古墳前期頃の甕形土器（第12図23）が出土しており、それ以降の構築とみられる。

【ピット】

径20～30cmの小穴が散布する。明確に柱穴と確認できるものはない。P03内からは火打石とみられるメノウ剥片（第12図29）、P04内からは平安時代の土師器長胴甕片（第12図27）が出土した。

(2) 遺物（第12図）

①弥生時代後期～古墳時代前期

23は甕体部で、細かなハケ目調整を行う。外面は縦方向、内面は斜め後横方向に調整を行う。SK03出土。

②奈良～平安時代

須恵器　24は、小型高台付壺の底部である。底径10cm、高台は外側へ張り出す。体部は直線的に立ち上がる。9世紀第３四半期頃。SE01出土。

土師器　椀・長胴甕がある。25は口径14cm、口縁はやや内湾しながら立ち上がる。器壁はやや厚く、雲母・ベンガラ粒・長石・石英粒を多く含む。8世紀代か。SD07出土。

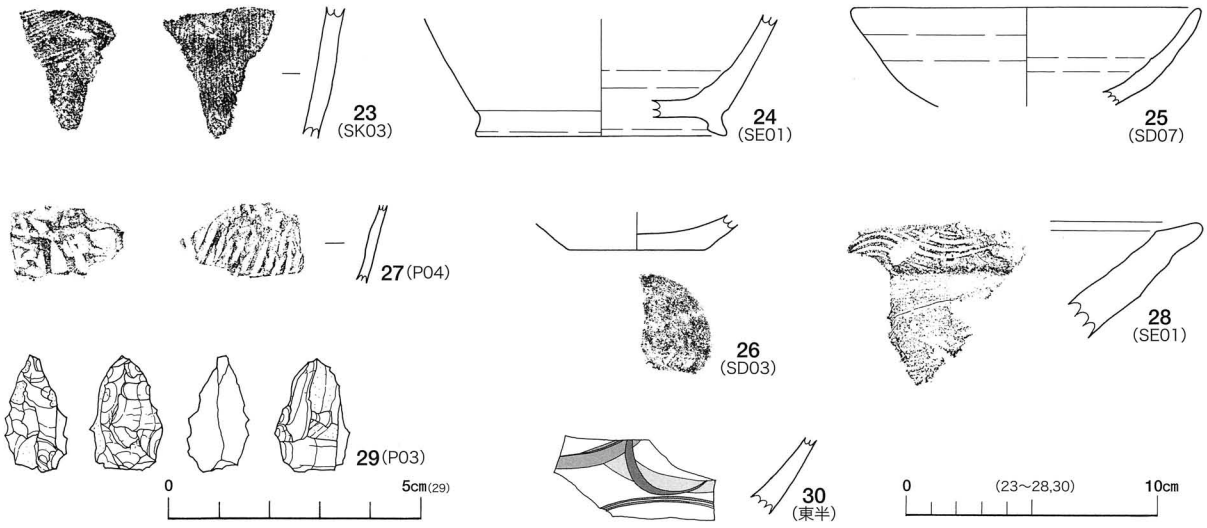
26は椀底部である。底径は5.5cmで、底部は磨耗が激しいが回転糸切離しとみられる。9世紀代とみられる。SD03出土。

27は長胴甕体部下半部である。外面平行タタキ、内面扇状タタキ整形を行う。9世紀後半以降とみられる。P04出土。

③鎌倉～安土桃山時代

珠洲　28は擂鉢の口縁で、端部を短く外反させ、内面側に卸し目で波状文を描く。吉岡編年（吉岡1994）の第Ⅴ期（1380－1440年代）とみられる。SE01出土。

火打石　29は黄褐色メノウの破片で、三角錐形である。1縁辺に小剥離痕が認められる。火打石



第12図　出土遺物

破片とみられる。P03出土。

④江戸時代

30は伊万里染付皿の体部である。草葉文様とみられる。調査区東部遺物包含層出土。

3　19年度調査

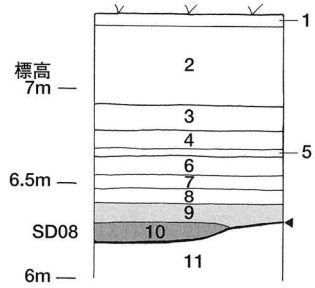
現道の南側拡張部の立会調査で遺構を確認した。調査箇所は西側県道から東へ37～51mで、古墳時代とみられる溝1本を確認した。

(1) 基本層序（第13図）

次に述べる古墳時代の溝ＳＤ０８検出地点で、道路下になる北壁面において基本層序を確認した。

道路構造部（砕石＋アスファルト）は水田面の上に直接構築されており、それ以下は旧地形を残している。現在水田面は第3～5層にあたり、その下には旧水田が存在する（第6～8層）。

第9層が中近世の遺物包含層で、遺物は極少である。第10層は古墳時代の溝ＳＤ０５の埋土。第11層は地山層である。



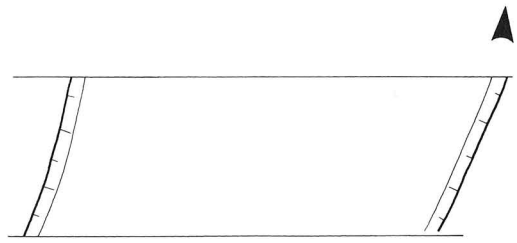
第13図　SD08東部土層（1：20）

1　アスファルト道路
2　砕石
3　旧水田耕土(黒褐色土)
4　旧水田耕土(黒灰褐色土)
5　旧水田床土(褐色土)
6　黒褐色シルト
7　黒褐色シルト
8　黒褐色シルト
9　黒色シルト(砂混じる)
10　黒褐色粘質シルト:SD05埋土
11　地山(黄色粘土)

(2) 遺構

【溝】（第14図）

北東・南西方向に延びる溝ＳＤ０８を、延長約2m検出した。主軸方向は概ねＮ－25°－Ｅである。幅は4～4.25m、最深部は溝中央で深さ16cmを測る。断面形は皿状を呈する。周溝の埋土は黒褐色粘質シルト土で、この土は平成13年度試掘確認調査で若王子塚古墳東側において確認した周溝の埋土と同質の土である。溝内からの出土遺物はない。（古川）



第14図　SD08平面図（1：80）　0　1　2m

Ⅳ　理化学的分析－井戸枠板材の樹種調査

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は富山市水橋金広・中馬場遺跡から出土した建築部材2点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

使用顕微鏡　Nikon DS-Fi1

3. 結果

No.	品名	樹種
7	井戸側板材	スギ科スギ属スギ
13	井戸側板材	スギ科スギ属スギ

1）スギ科スギ属スギ(Cryptomeria japonica D.Don)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

参考文献

島地 謙･伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙･伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

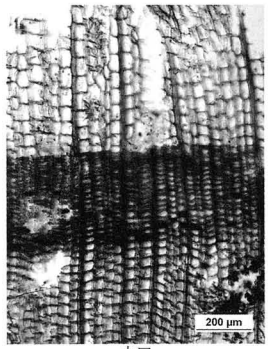
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎･村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ･Ⅱ」保育社（1979）

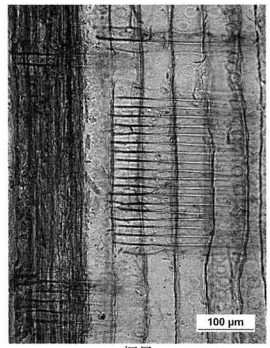
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

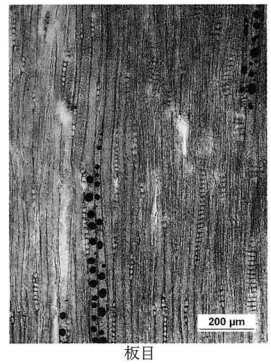
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）



木口

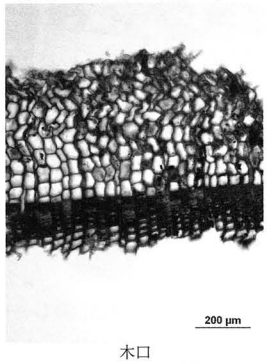


柾目

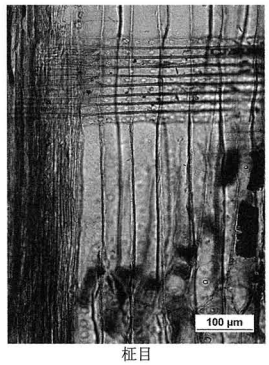


板目

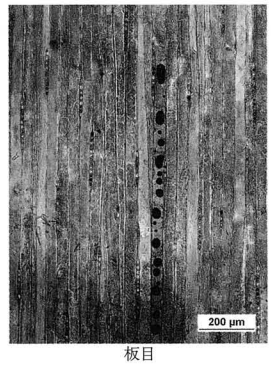
No-7　スギ科スギ属スギ



木口



柾目



板目

No-13　スギ科スギ属スギ

Ⅴ　総括

1　古墳時代の溝について

今回調査において、市道両路肩部分で検出された古墳時代溝ＳＤ０８についての検討を行う。

溝ＳＤ０８が検出された位置は、直径46mと推定されている若王子塚古墳の東～南東部の周溝推定位置よりも南東方へ離れ、周溝とは約4mの間隔がある（第15図）。

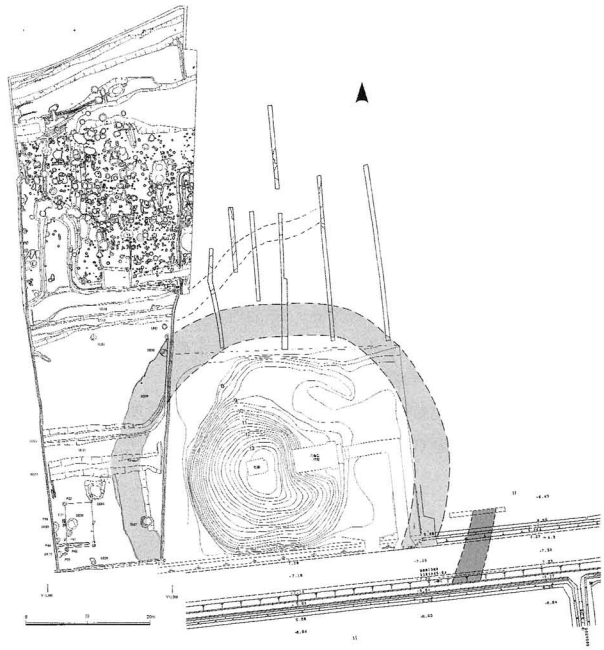
この周溝からはいずれも遺物の出土は認められなかったが、断面形態・埋土の性質などの点で、平成12年度に若王子古墳西側で検出された若王子塚古墳周溝と認定される溝と良く似ており、その帰属年代を古墳時代と考えることができる。若王子塚古墳周溝と異なる点としては、幅約4mで古墳周溝より1m程度狭いこと、溝の方向がやや直線的であることがあげられる。

平成14年度に実施された若王子塚古墳周囲における地中レーダー探査の結果によれば、（岸田・酒井2001）、墳丘北側における周溝位置が明瞭に把握され、これはトレンチ法により行った試掘確認調査結果とも符合した。また墳丘東側においては北側から延長する周溝外側ラインが明瞭に確認された。市道拡幅に伴う試掘確認調査や立会ではこの周溝は確認されていない。一方このレーダー探査では、ＳＤ０８の確認位置周辺での反応は明瞭ではない（第16・17図）。古墳の東側では古墳周溝外端から10m離れた位置に、周溝と平行するように、弧を描いた溝の反応が延長約30mにわたり確認することができる。

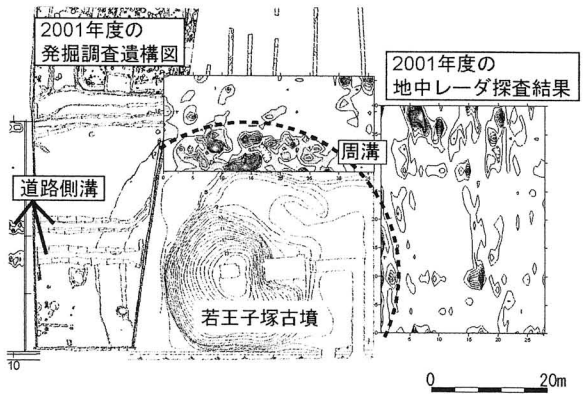
今回検出のＳＤ０８は、その全体構造は不明であるが、若王子古墳周囲における古墳形状と何らかの関係を持つ関連地割であると考えられる。

その内容を明らかにするため、周辺地域の古墳の状況について外観する。

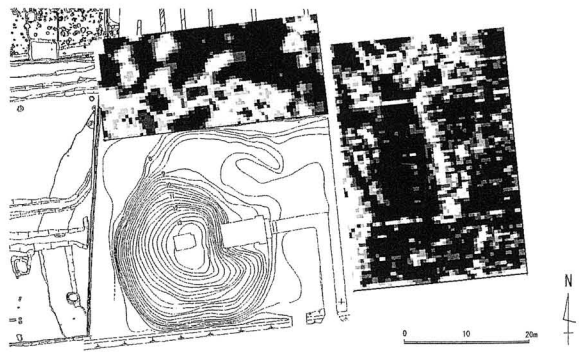
白岩川流域の上流側にある立山町稚児塚古墳（県史跡）は、墳丘径46m、周溝幅13mの円墳である。試掘確認調査の結果、周溝の外側に周溝と平行して幅12mの小高台が巡っていることが確認された（立山町教委1995）。報告ではこの部分を「周堤帯」と呼び、この外縁までを古墳の墓域とする理解が示された（第19図）。



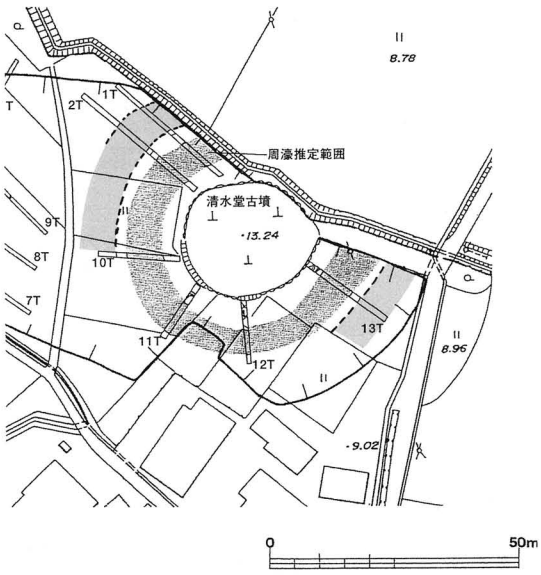
第15図　若王子塚古墳の周溝復元図と今回調査における溝の位置関係（1：1,200）



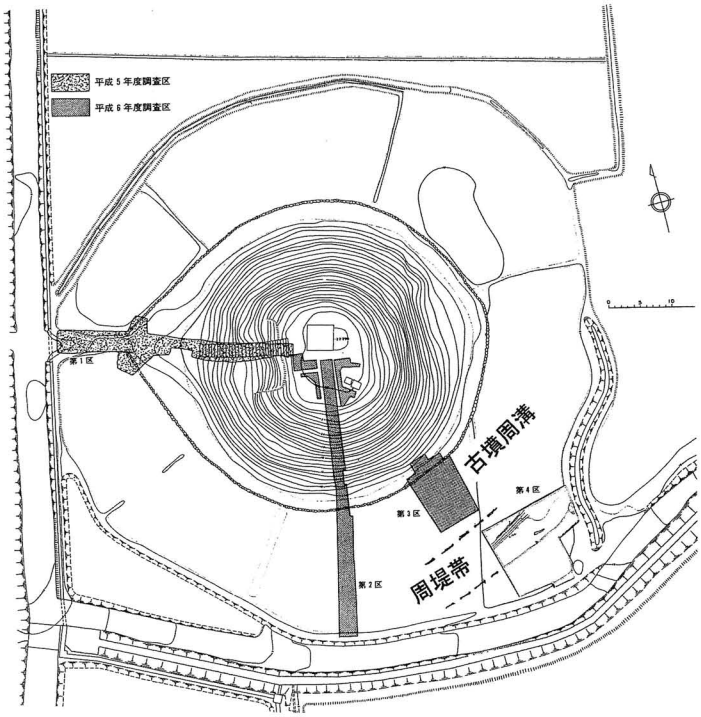
第16図　若王子塚古墳の周溝復元図（富山市教委 2006）



第17図　若王子塚古墳周辺のレーダー探査結果
（富山市教委 2001）



第18図　清水堂古墳周溝外側の低地部分
（内側のアミは周溝）



第19図　稚児塚古墳の周堤帯模式図（立山町教委 1995に加筆）

周堤帯の幅は約12mで、その外側の区域とは10～15㎝の段差により区画されていることが確認された。

若王子塚古墳の南東400mに位置する清水堂古墳では、試掘確認調査の結果、残存墳丘からやや離れて一周する幅7.0～7.5mの溝が検出され、周溝と推定されている（富山市教委1996）。この溝は若王子塚古墳同様10㎝程度の浅いものであり、調査当時は疑問がもたれていたようであるが、若王子古墳の調査成果からみて、周溝として差し支えないことが明らかになった。改めて調査成果を写真等で確認すると、1.2.10.13トレンチにおいて、この周溝の外縁は約2mの幅でやや小高くなっており、さらにその外側は一段周溝状に落ち込んでいる。その幅は周溝とほぼ同じである。全体を確認していないが、稚児塚のような段差というより、二重周溝になる可能性がありうる。

以上のことを参考にＳＤ０８の性格を考えると、明瞭な溝となっていることから稚児塚古墳のような段差による周堤帯とは異なっている。清水堂古墳のような二重に巡る形の溝であるかというと、それはレーダー探査や試掘によっても連続性を認め難いものがある。したがって現段階では、別の埋没古墳の周溝あるいは単独の溝と考えておくのが妥当とみられる。

今後の周囲の試掘・発掘調査等が進展し、若王子塚古墳周辺における古墳時代遺構の分布状況が把握されることにより構造が明らかになることを期待したい。

2　井戸について

中世の井戸ＳＥ０１は、厚板を用いた方形縦板横組構造である。その廃絶年代は出土陶器から1380－1440年代以降と推定された。

本遺跡では、今回検出例を含めこれまでに187基の井戸が確認されており、それらは13世紀から17世紀までの間に構築されたものである。ほとんどは素掘であるが、井戸枠をもつものが少数認められる。このうち方形縦板組構造のものは11基があり、全体の約6％を占める。その多くは15世紀から17世紀に属しており、集落形成後半期のものが多い。

ＳＥ０１は前述のように11年度調査で検出された井戸ＳＥ０９の構造と類似している。ＳＥ０９の廃絶年代は16世紀末から17世紀中頃と考えられていることから、これと構造的に類似するＳＥ０１の廃絶年代についても、その下限年代を同様に考える必要が生じる。

一方、集落域との関係で考えると、これまでの調査の結果、15世紀代までは遺跡南部の高台に

集落が形成され、16世紀以降遺跡中央から北部に集落の主体が移動するとされている。今回調査地点はこのうち遺跡北部の集落内に含まれる。試掘確認調査の結果をみると、中世期遺構・遺物は東側の2,3Tでも多くみられ、井戸周辺は遺跡の北辺中央部分に位置すると理解できる。

以上のことから、ＳＥ０１の廃絶年代は16世紀から17世紀中頃に置くことが妥当と考えられる。

3　井戸枠板材の加工について

井戸枠縦板に使用された板材は、遺構説明で示したように、下端部が加工されている。これまでの調査で検出された方形縦板横組構造の井戸では、縦板の先端の加工は顕著ではなく、先端は真横に切りそろえる例（14年度その1 ＳＥ08・ＳＥ４１など）が主体で、わずかに側面が斜めに切られているものがある（富山市教委2006）。本例では板の半分を斜めとし、残り半分はほぼ真横に切るという点で共通する。1点のみL字形に刳り込んでいる例があるが、これは木取りを柾目取りとしたために生じた例外とみられる。

先端部の加工方法を分類すると、以下の2種がある。

Ａ　片側から順次斜めに切り落としていくもの（2,3,4）

Ｂ　中央部と側部を異なる方向で切り落とすもの（9）

Ａでは、真横となる残り半分の加工は、斜め部分と同じ方向と工具で、真横方向に切っているもの（2,3）と、90度上から垂直に切り落とすもの（4）に分けられる。

ＡとＢの大きな違いとして、工具の刃の角度が異なることがあげられる。Ａでは板の長軸方向に対して60度からほぼ直角方向で刃が当てられるのに対し、Ｂでは30～35度と斜めに刃を当てて作業している。

その結果、Ａでは目的どおり作業を終えているが、Ｂでは２箇所に小さな突起部を残す結果となった。これは、木取による板目の方向によって生じた板の特性を、加工時に把握できたか否かの差を示すものと考えられる。（古川）

引用・参考文献

上市町教委・富山大学考古学研究室　1993　『富山県上市町柿沢古墳群　第1次測量調査報告』

岸田徹・酒井英男　2001　「若王子塚古墳における地中レーダー探査」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書―県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）―』富山市教育委員会

久々忠義　2001　「弥生農村の風景と政治社会の誕生」『ふるさと富山歴史館』富山新聞社

田嶋明人　1986　「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

立山町教委　1995　『稚児塚古墳―第2次発掘調査報告―』

富山市教委　1996　『富山市水橋　清水堂A遺跡　清水堂C遺跡　清水堂B遺跡　清水堂D遺跡　清水堂小深田遺跡　清水堂宗平邸遺跡』

富山市教委　1997　『富山市水橋金広遺跡　水橋田伏南遺跡　清水堂F遺跡　清水堂南遺跡』

富山市教育委員会　1999　『県営農免農道整備事業上条南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要（1）　富山市ＨＳ－０７遺跡』

富山市教育委員会　2001　『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書―県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）―』

富山市教育委員会　2005　『富山市水橋専光寺遺跡発掘調査報告書―「あいの里」分譲宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』

富山市教育委員会　2006　『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書「―県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）―』

富山市教育委員会　2007　『富山市小出城跡発掘調査報告書』

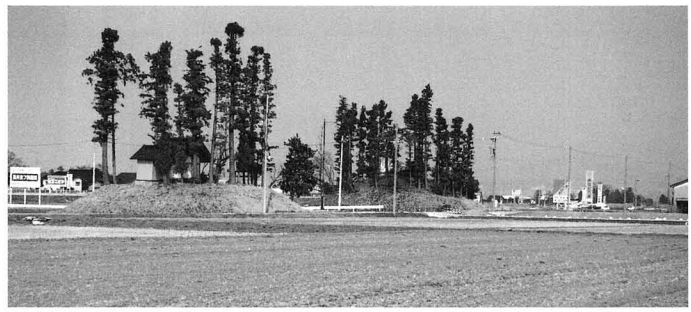
藤田富士夫　1998　「東大寺領大藪荘の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問　古代探求』中央公論社

藤田富士夫　2001　「古代の表象としての若王子塚古墳」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書―県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）―』富山市教育委員会

舟橋村教委　2001　『富山県舟橋村仏生寺城跡発掘調査報告』

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

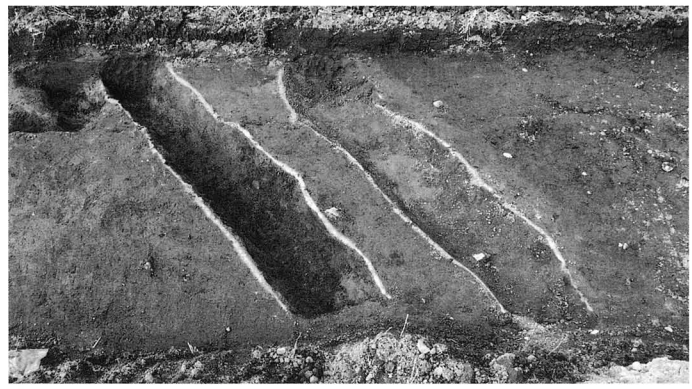
調査区遠景（東から）



調査地遠景（南西から）

溝ＳＤ０１・０２、ピット群（南西から）

調査区近景（西から）



溝ＳＤ０１・０２（南から）

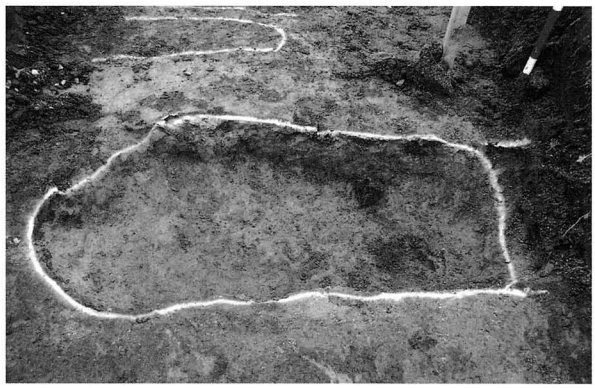
溝ＳＤ０２（南から）

溝ＳＤ０２遺物出土状況（北東から）

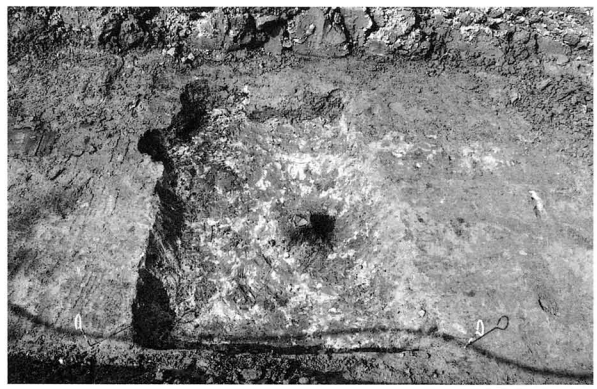
図版2　14年度調査

土坑ＳＫ０１（東から）

土坑ＳＫ０１土層（北から）

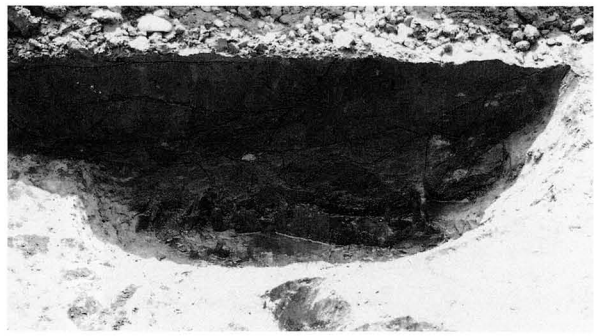


土坑ＳＫ０３（東から）



溝ＳＤ０７（南から）

井戸土坑ＳＥ０１井戸側検出状況（北から）



ＳＥ０１井戸枠縦板組上部検出状況（北から）

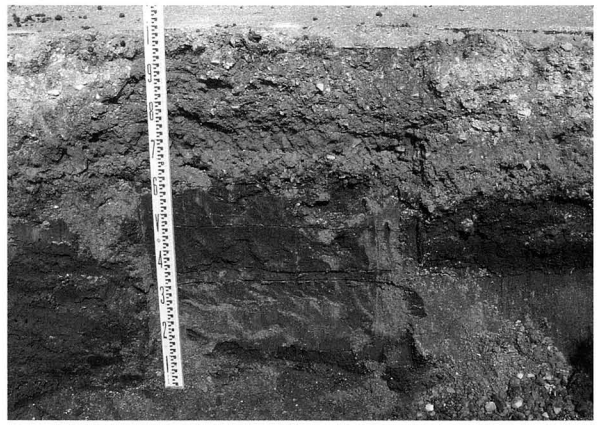
ＳＥ０１井戸枠縦板組取上げ状況

ＳＥ０１井戸枠縦板組上部検出状況（西から）

13年度試掘　古墳時代溝（東から）

17年度調査状況（南西から）

17年度調査状況（東から）



17年度古墳南側土層断面（南から）

19年度古墳時代溝（南東から）

19年度古墳時代溝検出状況（西から）

19年度古墳時代溝断面（南から）

20年度遺構検出状況（西から）

20年度遺構検出状況（西から）

20年度遺構検出状況（東から）

2

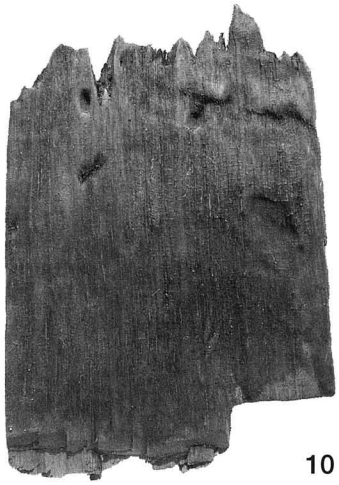
3

4

8

9

7

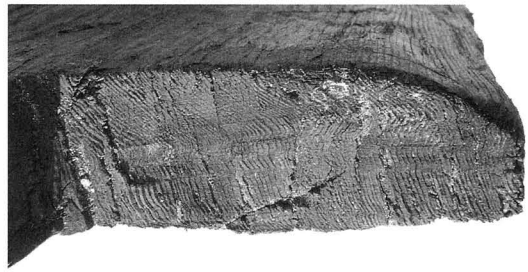


10

5

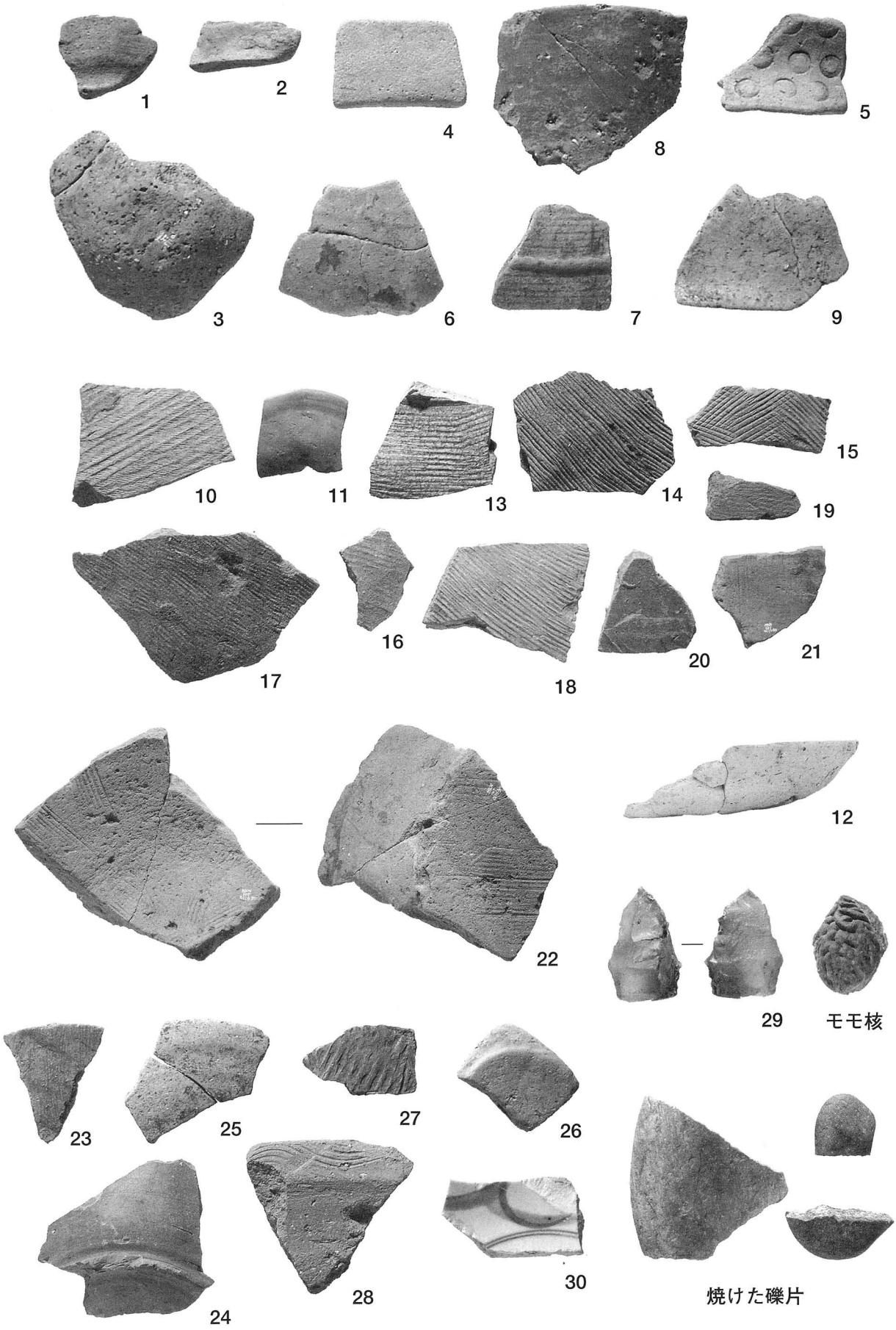
1

10　先端左側の加工痕



10　先端端右側の加工痕

図版5　遺物


1
2
4
8
5
3
6
7
9
10
11
13
14
15
19
17
16
18
20
21
12
22
29
モモ核
23
25
27
26
24
28
30
焼けた礫片

報告書抄録

ふりがな	とやましみずはしかねひろ・なかばんばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書
副書名	市道水橋中馬場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	35
編著者名	古川知明・鹿島昌也・野垣好史
編集・発行機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町一丁目2-24　　TEL 076-442-4246
発行年月日	西暦2009年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
富山市水橋金広・中馬場遺跡（とやましみずはしかねひろなかばんばいせき）	富山市水橋中馬場（とやましみずはしなかばんば）	16201	201251	36度42分50秒	137度19分00秒	20030302～20030402	344	市道水橋中馬場線道路改良事業
						20050926～20060328	76	
						20071105	47.6	
						20080924	40	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富山市水橋金広・中馬場遺跡（とやましみずはしかねひろなかばんばいせき）	集落・城館	弥生～古墳	土坑・ピット	土器	
		平安	ピット・溝	土師器・須恵器	
		室町	井戸・ピット	珠洲・かわらけ・青磁・火打石・モモ核	

要約

水橋金広・中馬場遺跡における道路拡幅工事に伴う調査で、古墳時代の土坑・溝、平安時代のピット・溝、室町時代の井戸・ピットを確認した。

古墳時代の溝SD08は、幅4m以上で深さ10～20cmと浅いものであるが、若王子塚古墳西～北側において検出された周溝と埋土が同質であることから、古墳時代の溝と考えられる。ただし、検出された位置は、直径46mと推定されている若王子古墳の東～南東部の予定位置よりも、南東方へ離れる。このことからSD08は、若王子古墳の周囲の関係地割もしくは若王子古墳とは別の古墳の周溝と考えられる。周囲における過去の地中レーダー探査の結果を援用すると、今回確認した溝の北延長上にはこれと続くような帯状の溝らしきものが確認され、古墳周溝と平行するように見える。また確認した溝は東方向へは延びていないことから、前者の可能性が高い。

中世の井戸SE01は、方形縦板横組の構造で、厚板を用いている。井戸内部から吉岡康暢編年Ⅴ期(1380-1440年代)の珠洲摺鉢が出土していることから、廃絶年代が南北朝から室町前期であることがわかる。本遺跡ではこれまで186基の井戸が確認されており、うち方形縦板組構造のものは11基がある。その多くは中世後期から近世前期に属している。SE01は室町前期以後の廃絶と理解されるが、近世前期まで下る可能性は残る。

井戸枠の板材はスギを使用している。1枚が柾目取りのほかはすべて板目取りである。先端部は側面を削り尖らせるなどしており、その方法はいくつかに分類できる。

富山市埋蔵文化財調査報告35

富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書

－市道水橋中馬場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

発行日　2009（平成21）年3月31日
発行者　富山市建設部道路課
富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町一丁目2-24
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中央印刷株式会社